

建設的なダイアログを求めて —「異文化コミュニケーション A & B」奮戦記—

久米 昭元

アメリカ留学から帰国後、名古屋、神戸、千葉の各大学で計20年以上勤め、2000年の10月から立教大学にお世話になった。振り返ってみると8年半の立教生活は息つく暇もないほどの忙しさで、まさに「あっ」という間に過ぎてしまったと感じるほどである。忙しかった一因としては、主として大学院の異文化コミュニケーション研究科で仕事をさせてもらっていたのだが、そこは博士前期課程の学生が60～70名の上、博士後期課程の学生も15名以上在籍していて、大学院としてはかなりの大所帯となっていた。ということで、学生の指導やそれにまつわる会議など、研究科の仕事だけで手一杯なのに、その上、学部関連、全学共通カリキュラム関連の仕事が雨あられと降ってきた。要領の悪い私は、まさに降り注ぐ仕事の山を片づけながら、毎日なんとかサバイバルするだけで青息吐息の8年半であった。

しかし、あらためて立教での教員生活を振り返って気づくのは、私だけでなく、各教員が実にたくさんの仕事や会議を抱え、年中忙しくしていたことである。しかも、必ずしも強制されたわけではなく、それぞれがこの学び舎を素晴らしいものにしていくために何かに突き動かされているかのごとくに、自発的かつ積極的に仕事をこなしていたことだ。また、自由にものが言えるようになりベラベラな雰囲気もあり、年を追うごとになかなかいい大学だと思えるようになった。今回は、一部担当していた全学共通カリキュラムについて

のエッセイをという依頼を受けたので、就任当初から担当し、思い入れもあった全カリの英語自由選択科目「異文化コミュニケーション A & B」(前期がA、後期がB)について、主に授業での苦闘について回想風に述べてみたい。

一般的に科目としての「異文化コミュニケーション」のねらいは、異質な背景を持つと思われる人とのコミュニケーションについてあらゆる角度から検討し、人と人のコミュニケーションに文化的な諸要因がどのようにかわってくるかということ考察することである。また、何をもって異質というかであるが、一般的には「外国」の人のみを考えることが多いように思われるかも知れないが、実際は使用言語から、居住地域、性別、世代、教育歴、職業のような違いから、上司と部下、親と子のような社会的地位や立場の違いまで広い差異が含まれる。

異文化コミュニケーションという現象は人間の歴史でも相当以前からあったはずであるが、人・モノ・情報が国境を越えて行き交う現代社会にあっては、ますますその重要性が増しているといえよう。そのような重要なテーマを研究し、未来を担う若い人々に教えることは自分自身にとっても大きなチャレンジでもあり、大変興味深いことだと思っている。しかし、その実践となると、言うは易し行は難しである。誰もが理想的な異文化コミュニケーションができたなら、それこそ世界平和が一挙に実現するほど素晴らしいことだと思うのだが、相手との関係の中で、

よほどの条件が整わない限りうまくいかないのが現実であり、またその教育に関しては、なおさらである。

さて、この全カリでの異文化コミュニケーションであるが、実際は私が就任する数年前からできていたと聞いた。私は1979年から異文化コミュニケーション論を担当してきたので、この授業もなんとかなると気楽に考えて引き受けたが、実際授業案を練り始めると大きな問題があることに気づいた。英語自由選択科目として開講されていたため、英語を使って異文化コミュニケーションについて教えることが決められていたのだ。今まで日本人学生を対象とした講義は当たり前のように日本語で教えていたし、異文化コミュニケーションは別に語学とは直接的に関連のある科目でもないのだから、大変戸惑った。日本人学生を対象とした授業なのに日本語が母語の私がなぜか英語で講義…というまったく必然性の感じられない英語使用に対し大きな違和感を覚えた私は、この苦境を脱する方法は無いものかと必死で考えた。

そこで、思いついたのが、留学生にも参加してもらい、クラスそのものを異文化コミュニケーションの場にしてしまうということだった。例えば、私が1970年代にアメリカのミネソタ大学大学院でIntercultural Speech Communicationというクラスを取ったときは40名定員のうちアメリカ人と外国人学生がちょうど半々で、留学生たちとアメリカ人学生がお互いに学びあう刺激的な場になっていた。実際、このクラスに参加し、アメリカ人学生や留学生のクラスメイトから多くのことを学んだことは、その後異文化コミュニケーション研究者、教育者としての私に大いに影響を与えたといえる。

さて、私がアメリカで体験したように参加者がお互いの意見交換から学ぶ

異文化ワークショップのようなダイナミックな授業を目指して始まった全カリの異文化コミュニケーションであったが、実際それを日本で実現するのは簡単なことではなかった。まず、一番大きな問題は、日本人学生の消極性であった。自由選択科目であるため、受講する日本人学生は、ほとんどの場合、英語力に自信があって、外国人学生たちとのコミュニケーションに対しても大変意欲的な学生となっていた。しかしながら、グループディスカッションになると、いつも留学生に圧倒され、日本人学生は聞き役に回るということが毎年のように繰り返されてきた。

また、このことは単に英語力不足のみ起因しているともいえないのだ。例えば、留学生と言ってもノルウェー、オランダ、フランス、ドイツなどのヨーロッパの国々や、インドネシア、フィリピン、タイ、中国、台湾など英語を母語としない学生も多く、読み書きのみの力という面では必ずしも日本人学生より優れているともいえない学生も交じっていた。ところが、日本人学生と英語力があまり変わらない留学生たちでも、実際のディスカッションの場では日本人の3倍、4倍とはるかによくしゃべるのが常である。結果的に、当初は結構自分の英語力に自信をもって意気揚々と参加していた日本人学生たちでも2回、3回と講義が進むに従って徐々に自信を失い、挙句の果てには留学生たちが喧々諤々と日本の文化や日本人の行動の不思議さについて語り合っているのをまるで傍観者のように黙って聞いているというのがよく見られた光景であった。

この日本人学生の「おとなしさ」については、留学生の側も彼らの意見のなさにいらいらしたり、いぶかしく思ったりしているようであった。日本の学生たちが大学に入るまで小・中・高等

学校でどのように教育され、過ごしてきたかという日本の教室文化を知る者にとっては、彼らのおとなしさも当たり前前の光景と捉えられようが、そんなことを知らない留学生にとっては、ただおとなしいのか、英語ができないだけなのか、それともディスカッションに参加する意欲がないのか…と日本人学生の態度が理解できず当惑するばかりであったようだ。これこそ、日本の文化の一部であると言ってしまえばそれまでだが、やはり教員としてクラスをコーディネートしていた身としては、もうちょっと何とかならないかといつてもどかしく感じていた。

常々思っていたことだが、この「おとなしさ」の基になっているのは、日本人学生の自我意識の薄さではないだろうか。本来ならば自我意識の基になっているはずの自分の考え方や絶対に譲れない価値観といったものに対する意識が全くない、もしくはそんなことは考えたこともないといった学生が非常に多いように見受けられる。大学生になるまで、先生や周りの人の言うことを素直に聞いて、言われたとおりにおとなしくさえていればうまくいくといった考えに支配され育ったような彼らは、まさに自我意識の欠けた空っぽの箱のように感じられる。そんな空っぽの箱状態の彼らに突然、「大学生になったのだから、自分の意見を表明せよ」と言ってもそれは無理難題ともいえるのかもしれない。

日本との比較でよく引き合いに出されるアメリカ文化であるが、彼らの場合はそれこそ幼児期から「何がしたいのか」「何が食べたいのか」「どこに行きたいのか」「どうしてそう思うのか」などこと細かく言語で表明することが求められる。黙っていても、何が食べたいのか察した母親が勝手に作って出してくれ、いろいろ質問攻めにすれば

「うるさい」と疎まれる日本社会とは確かに対照的ともいえよう。このようにアメリカ人との比較で日本人がおとなしいという話はそれこそ英語教員の間では常識となっているが、こんなにまで自分の意見を言うことに慣れていないのは、実はそれこそ世界の中でかなりの少数派といえるほど珍しいことのように思える。例えば、韓国、中国、台湾といった近隣諸国の留学生たちもはるかによくしゃべる。会話が日本語であっても、英語であってもそれは同じことだ。つまり、根本的なところで日本人の学生たちに欠けているのが先ほど述べた、「自分は他の人たちと違ったユニークな個人である」という意識とともに、「自分の考えを相手に伝えたい」という意欲だという気がしてならない。このように、強い自我意識とコミュニケーションに対する意欲の欠けた日本人は世界のあらゆる場所で「顔が見えない」「何を考えているのかよくわからない」と不評を買うことになっているといえよう。

つまり、異文化コミュニケーションの観点で言わせてもらえば、問題なのは「コミュニケーション能力」の不足なのではなく、「コミュニケーション意欲」の不足であるということになる。よって、たとえば大学生になっても英語の授業で話せないという問題の解決策として英語のカリキュラムをいじるより、まず必要なのは「自分の意見は何か考える」癖をつけさせ、そして、「考えをまとめ」それを「他者に伝える」という一連のことがスムーズにできるように教育することではないだろうか。もちろんこのような教育はまずは母語である日本語でできるようにすることが先に来るはずだ。日本語で何も言えないのに英語で話せるはずもない。よって、例えば現在英語力の改善のために小学校からの英語教育を始めるといっ

た動きになっているが、勝手なことを言わせてもらえば、中途半端な英語教育に大切な時間を使うよりも、国語教育の内容を見直し、「他者とのダイアログ」ができるような「考える力」「伝える意欲」をもった子供を育てるカリキュラムを目指したほうがよほど効果が上がるのではないだろうか。

現在、「空気を読む」という言葉が流行語のようになって、ますますまわりに合わせることに執心するあまり、自らの意見を封印しようとする学生が増えたように感じられる。このような傾向はどう考えても不自然であり、不健康なことに思われてならない。近年、うつにはじまりさまざまな精神疾患に苦しむ学生が増えてきているのも、この「人に合わせるべき」という呪縛があまりに強すぎるのと何らかの関連性があるように思われる。きっちりしていて信頼感のある住みやすい国であるはずの日本が、そこに住む人にとっては実は窮屈で言いたいことも言えない国になってしまうのは実に残念と言えよう。自分はユニークな考えを持ったかけがえのない個人であり、また相手も同じように尊い個人であるという事実をしっかり認識し、他者と本当の意味でのダイアログができるような学生たちを世に輩出することこそが我々教育者に求められていることではないだろうか。

くめ てるゆき
(本学異文化コミュニケーション学部
教授・異文化コミュニケーション
研究科教授)